

91 傾きぎ

極めんとする
冬の陽の
胸奥にまで
射し込みにけり

96 旅の空

改めて知る
生業の
つつがなき日々
有難きかな

101 感謝しつ

感謝されつつ
人生を
辿ればそこは
虹の搖籃

92 うち続く

秋霖明けて
秋桜の
暗き光に
輝きてあり

97 愛おしき

うからやからの
清き夢
全て叶へと
星に願へり

102 時とじつ

暗転もする
人生に
君よあれかし
野菊の如く

93 朔風に

向いて立てば
わがいのち
いよいよ清らに
研がれてゆきぬ

98 幼児の

瞳に映る
丸き空
その清らかさ
永久に続けし

103 白南風に

カンナのは
はためきて
輝き溢る
盛夏至れり

94 ゆくゆく

心の萎ゆる
冬の日ほ
手負いの獅子と
布団に潜る

99 争つた

朽ち果つ心
抱きつつ
足どり重く
辿る家路か

104 日溜りに

頭上を過ぎる
北風の
音を聞きつつ
春待つなづな

95 楽な徑

愉しき道に
人生の
宝を我は
失ひにけり

100 往く春に

馬酔木を濡らす
小糠雨
いとど静かに
胸に沁みけり

105 滲みては

やがて玉なし
滴りし
あの夏の日の
汗の染よ

106 薄さゆへ
意識のなかで
鮮やかに
輝きてあり
黄水仙かな

111 春の日に
本に挿みし
一枚の
桜花弁
セピアにて秋

116 故郷の
冬の浜辺の
日掃りに
臉を閉じて
聴く風と波

107 双手あげ
おぼつかなくも
立たんとす
この幼な尻に
天よ微笑め

112 びんばたよ
莞爾と笑ひ
雑踏に
消え往きし朋
巻なきかや

117 人生は
方形でなく
円でなく
楕円でもなく
螺旋に似るか

108 木枯の
音を聞きつつ
頸すくめ
蒲公英一輪
春待つ日溜り

113 水仙の
蕾ぐんぐん
膨らみて
はや冬の底
近づきにけり

118 夕間暮れ
梔子香る
柚道を
不安と希望
揺れつつ進む

109 来復の
光の中に
沈丁花
花芽ぐんぐん
膨らましおり

114 川鯉の
翡翠の光
清流に
映りて清か
初夏の溪

119 凛冽の
寒の戻りの
夕空に
春待月と
名付けし人よ

110 シーボルト
所縁の花と
聞きしより
愛しむ舞る
桜草かな

115 カイラスの
山懐の
ガレ場にて
いで湯に憩ふ
姫ありけり

120 ゆへりなく
苦き世なれど
今日もまた
時空をこえて
飲み下しけり

121 発つ君も
残る私も
共に
旅人なりし
人生の秋

126 孤独どう
広い世界の
門前に
たたずみおりき
いまにて想へば

131 オリオンを
抱きて聳ゆ
ゆりの木の
頂きは指す
天空の芯

122 隧道の
彼方に灯る
一点の
明りに心
弾みゆきけり

127 少しずつ
父母の想いの
身に滲みて
子ら育ちゆく
秋の夕暮

132 孤独をば
嘆くな泣くな
そこそは
大なる門
君潜るべき

123 幼き日
父の背中と
母の膝
安らぎありて
我の現在あり

128 うつらう続く
厳冬なれど
足許に
葦一本
蕾み初めけり

133 風落ちて
鏡の如き
池の面に
天狼ありて
地球はめぐる

124 空をゆく
雲に乗せたる
わが想い
希望の風に
遠くゆけ

129 わが生は
巡礼なるか
今日もまた
感謝の鉦を
うち鳴らし往く

134 憎しみが
憐憫にまど
昇華する
春雨の音
桜は蕾む

125 人生の
マゼラン海の
風濤に
負けるな朋よ
大洋は待つ

130 そしげど
皆で分けあう
喜びの
溢れていた
夕べの宴

135 少しずつ
松籟の中に
溶けゆかん
西風来る
秋の松原